【主題】「地域をまきこんで取り組む安心・安全な学校づくり」

【副題】～自分も周りも大切にする児童を育てるために～

【学校・団体名】奈良県大和高田市立菅原小学校
【役職名・氏名】校　長　吉川　淳

１　研究主題設定の理由

本校は奈良県中部に位置し、昔は堺から伊勢へと抜ける伊勢街道の宿場として、また現在は、大和高田バイパスや京奈和自動車道が交差しているなど、車の往来が多い場所に位置している。校区内は多くの田畑が点在し落ち着いた雰囲気ではあるが、近年の宅地造成に伴い児童数も増加傾向にある。このような状況のなかで、生活する上での課題が山積している。喫緊の課題として、校区内の道路について、車両が抜け道として生活道路に侵入することが多いため交通事故も多発し、児童自身が常に気を付けての通行が必要であることがあげられる（図１）。校区も登下校に片道 30 分以上かかる程度の広さがあり、地域の方の見守り活動も積極的に行われているが、普段は人通りも少ない状況である。信号も非常に少なく、自分自身の判断で行動することが求められる。

図１　校区内の事故発生場所（赤丸）

また児童の学校内の様子は、避難訓練等で決められた行動をとることはできるが、教員の指示のない場合は、主体的に適切な行動をとることが難しい状況であった。さらにＳＮＳやインターネットなど児童を取り巻く新しい危険に児童が巻き込まれない知識や行動も必要になっている現状もある。

以上のことから、児童一人一人がまずはネット上自分の命を守る行動をとれるようになることが、今後非常に大切であると考え、一昨年度から安全教育をテーマに全校で取組を進めることにした。また、地域や保護者の方にも協力していただく機会を積極的に設けることで、学校だけの取組にならないように配慮していくこととした。取組を始めた時期がコロナ禍ということで、感染状況に左右されながらの実践が続いた。

２　研究の内容

〇学校全体での方向性の確認及び取組の継続
〇発達段階に応じた系統的な安全教育の構築
〇児童の主体性を重んじた委員会活動の推進
〇保護者・地域と連携した取組の推進

３　具体的な取組

〇学校全体での方向性の確認及び取組の継続

まず、学校の安心・安全を守るための取組としては、月に１回「安全の日」を設け、児童に学校内での安全や交通安全について呼びかけや点検を行った。

また、避難訓練については、非常時においても安全を確保するという観点から、年４回実施している。保護者への災害時での引き渡し訓練については、コロナ禍で中止した年度もあるが、保護者との連携のために感染状況により制限されながらも実施可能な際は実施していくことを各年度当初に確認をした。

〇発達段階に応じた系統的な安全教育の構築

生徒指導部長が中心となり各学年の生徒指導部員らがすすんで、生活科や総合的な学習の時間、社会科など教科・領域等で関連させながら取組をすすめた。

１年生は、児童同士の関係を大切にしていくために、学校探検や名刺交換などの活動を行った。身の回りには先生や地域の人、上級生など多くの人たちが見守ってくれていることを知るために、通学路の様子や自分たちの安全を守ってくれる人や物に目を向けるように学習している。生活科「がっこうにくるみち　かえるみち」の学習では校区を実際に歩きながら、通学路

図２　校区を歩きながら電柱幕探し

の良さや学校周辺には自分たちの安全を守ってくれるものが多くあることに気づいていた（図２）。取組の結果、児童は学校にも慣れ友人関係も広がってきた。

２年生は、生活科において、安全教育を取り入れた町探検の学習を行った。以前は、校区内の施設やお店などを探すことを中心にしていたが、そこに交通安全の視点で道路標識やガードレール・自動車の交通量などを調べることで、視覚的に交通安全に対する意識を持たせることができた。また、登校部団の地図作りや交通安全カルタ（図３）作りの活動をすることで意欲をもって学習を進めることができたとともに、放課後等に気をつけて通行するようになった。

図3　安全カルタ

図4　交通安全マップ

３年生は、総合的な学習の時間において、１学期に行った校区地図作りと交通安全教育を合わせた学習を行った。どのような事故が起こり、危険が潜んでいるのかを校区を巡りながら確認し、通学路や自分たちの家の近くを調査した。その結果を友達と意見交換をし、児童の危険に対する考えが深まっただけでなく、放課後等生活をするなかでも、気をつけて通行するようになった。また、校区内の交通安全マップ（図４）を作成し、校内の目立つところに掲示することで、学年で情報を共有するだけではなく、全校への啓発につなげていた。

４年生は、社会科の大和川大水害についての学習と総合的な学習の時間を活用して「水害」をテーマに学習を行った。校外学習での「森と水の源流館」と「大滝ダム」への見学で学んだことや、水害について自分たちで調べたことをプレゼンアプリでまとめ、全体で共有したあと意見交換をした（図５）。学習を通して、水害から身を守るために普段から備えておくことを児童自身で考えるようになりつつある。今後は、突発的に起こる水害に対しても自分の知識や行動力でいざというときに自分や周りの人を守れるように取り組んでいきたい。

図5　プレゼンの様子

５年生は、４年生で取り組んだ水害から範囲を広げ、災害全般について学習した。社会科や理科での台風の学習や、総合的な学習の時間を使って自然災害の学習をはじめ、野外活動で森林の大切さや偉大さを肌で感じ、自然の素晴らしさとともに、自然の恐ろしさについても触れながら活動を進めた。調べ学習を中心に、児童は自分の知りたい災害について調べ、ポスターやプレゼンアプリを使ってまとめ（図６）、全体に発表・交流している。さらに、いつか起こりうる災害に対しての備えや知識を家庭でも活用できるように今後も学習をすすめる予定である。

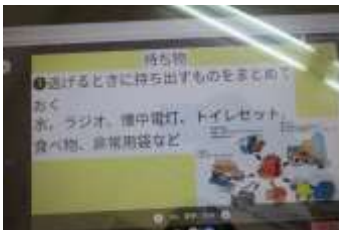

図6　災害についてのまとめ

６年生は、防犯をテーマに取り組んだ。今、多くの児童がスマートフォンやタブレットなどでたくさんのつながりを持っている。児童同士のトラブルだけでなく性被害や犯罪に巻き込まれる可能性もあるため、身近にあるSNSの安全な利用や危険性を知るために、スマホ人権教室として出前授業を受けた（図７）。そして、児童が普段使っているアプリやゲームに潜む危険について実際にあった出来事をもとに考え、話し合いを進めていった。さらに、不審者などに対する防犯という面でも学習を進め、事件に巻き込まれないための知識と能力を育てていきたい。

図7　人権スマホ教室の様子

取組のなかには、以前から学年で行ってきたものもあるが、全校で系統的に取り組むことで、取組の類似や重複することなく発達段階に応じた実践を深めることができた。

課題としては、マップ作りや発表等がゴールとなってしまい、地域での生活に生かし切れているかが把握できないこと、また、学習したことを、保護者や地域に発信できていないことが見えてきた。普段の生活に

さらに生かし、地域に発信できるような取組に挑戦していきたい。

〇児童の主体性を重んじた委員会活動の推進

各学年の取組と同時に、児童の主体的な活動を促すことを目的に、委員会活動においても安全教育に取り組んだ。

保健安全委員会では、児童自身が校内でのけがの発生状況を調べ、「すがはらけが安全マップ」（図８）

図８　すがはらけが安全マップ

としてまとめた。校内でのけがの情報を視覚化することで、けがをしない生活を考えることや危ないところを意識して生活すること、本校のけがの特徴を調べ学校の環境改善につなげることができた。この取組から、安全に対する児童が保健安全委員会の児童の意識は高まり、積極的に活動に取り組んでいる。

また、美化栽培委員会では、人がつながることから、安心安全な環境がつくられると考え、その第一歩として、声をかけあうことを委員会中心に取り組んでいった。さらに「あいさつの花プロジェクト」（図９）として、さらに取組をすすめた。児童が花びらにすてきなあいさつをしている人の名前を書き、ボックスに入れ、それを委員会の児童が昇降口の掲示板に貼り出し、全校で大きなあいさつの花を咲かせようというものである。これまで児童は教職員には比較的挨拶をする様子は見られるが、地域の方や家庭内、さらに友達同士のあいさつはあまり聞こえない状況であった。また最近はマスクをしていることから、はっきりと表情がとらえにくく口元も見えないなかで、「相手に伝わるように」「自然に」「誰とでも」挨拶ができるように取組をすすめた。その結果、写真のように見事な挨拶の花が咲いている。今年度は「相手の目を見て、相手に届く声で」をめあてに、たくさんのあいさつの花が咲かせられるよう取組を継続することで、次第に挨拶をする児童がさらに増えている。なかには、校外学習中に出会った地域の方に元気よく挨拶をしている児童もおり、地域の方がわざわざ学校に御礼の連絡をくださったことがあった。

図９　あいさつの花プロジェクト

さらに、運営集会委員会では「にこにこあいさつ週間」に取り組んだ（図 10）。高学年の委員が昇降口で率先して挨拶を行うことで、下級生の児童にも挨拶の重要性に身をもって知ってもらうことができた。加えて各学級で挨拶に関するめあてを考え、それを達成できたら１日に一人一枚シールを貼り、みんなで大きな挨拶の太陽を作るという取組を進めている（図 11）。低学年からは「挨拶を楽しくすることができた。」や「朝から気分がすっきりとした。」という感想があった。また高学年では「挨拶をする自信がなかったけれど「あいさつ週間」のおかげで挨拶ができるようになった。」や「挨拶をしてくれる人が笑顔で「おはよう」と言ってくれて朝からいい気持ちになれた。」という感想もあった。

図10　にこにこあいさつ週間

図１１　大きなあいさつの太陽

これらの取組により、学校全体において自発的でなくとも挨拶が自然とできるようになるきっかけになったのではないかと感じている。しかし、これらの取組だけですぐに「相手に伝わるように」「自然に」「誰とでも」挨拶ができるように取組を続けていくことで、挨拶を通じて「児童と児童」「児童と家族」「児童と職員」「児童と地域」をつなげていけるのではないか、またそのつながりが安心安全に結びついていると実感している。

〇保護者・地域と連携した取組の推進

各学年、委員会の取組だけにとどまらず、地域の各団体にも協力を依頼し、取組をすすめた。市生活安全課の協力を得て、発達段階に応じた交通安全教室を実施していただいた。この取組は、事故を未然に防ぐための予防教育として行っている。今年度は１・３・６年で実施した。１年生は登下校について、３年生は正しい自転車の乗り方について、６年生は部団旗を使っての安全な部団登校について、児童の実態に合わせて体験活動を取り入れた。なお２・４・５年生は警察署から交通安全啓発DVDを貸し出して頂き、学年で交通安全の学習をすすめた。

また下校時刻を中心として、児童や地域に向けて交通ルールを守り安全に帰宅できるようアナウンスを流しながら見回りをしてくださっている「菅原校区自警団」の取組を、学年をまたいで学習した。自警団に関する学習を通して地域ぐるみで安全を意識して取り組まれていることを知ることができている。この取組については、成果としてはっきりと見えてくるものではなく、啓発的なものであるが、児童の登下校や放課後における大きな交通事故は起きていないことから、今後も継続して取り組んでいくことが必要である。

加えて、学校地域パートナーシップ事業「すがはらコミュニティ」においては、民生委員さんやＰＴＡ役員さんと共に協働しており、他の活動とともに児童の登下校の見守り活動について話し合っている。その部会のなかで「通学路等に地域で見守っているとわかるようなのぼり等設置してはどうか」という提案があったので、早速学校玄関や通学路に設置した（図12）。あわせて、ＰＴＡ活動において従来から地域ぐるみと取り組んでいる「子どもＩＩ０番の家」の登録件数の登録を地域の保護者や企業・団体に求め、一昨年度比4割増加となった。見守り活動を実際に行っているのは登下校の時間のみであるが、のぼりや「子どもＩＩ０番の家」の旗が点在することで、見守り活動時間外においても、見守り活動を行っている地域だということをアピールすることができ地域の方々からも好評を得ている。

図１２　のぼりの設置

最後に、前述の避難訓練については、学校を開放して実施するオープンスクールの際に、保護者を交えての引き渡しを行った。児童の避難訓練の様子の参観後、大規模な災害を想定し保護者の方へ確実に引き渡す訓練をすることができた。それにより、児童だけでなく保護者の方にも災害時の緊急下校についての意識を持ってもらうことができた。しかしながら、課題もみえた。実際に大規模災害が起きたときには、車両での迎えも予想されるが、訓練では自宅から徒歩あるいは自転車での参加となっている。学校周辺は非常に道幅が狭く、車両でのお迎えを控えるよう呼びかけたいが、有事の際は保護者をどのように誘導し、混雑を避けるかを事前に検討しておくことが必要であることが見えてきた。今後も引き渡し訓練以外も休み時間や予告なしでの地震発生の避難訓練、不審者に対しての防犯訓練など、引き続き行い、毎回の合言葉として「君たちの命以上に大切なものはない」「自分の命は自分で守る」と伝えている。

４　まとめと今後に向けて

以上の取組を通して、コロナ禍で児童の出席停止者も時に全校児童の半数にのぼったり、保護者の来校もかなりの制限をかけなければならなかったりした状況下、児童が安心して学校生活を送るためには、周りの大人の見守りや、児童自身が安心して過ごすことのできる環境の構築が非常に大切であることを実感した。

また、全国的にコロナ禍で学校に来にくい児童が増えたとも聞く。本校も継続して対応しているところであるが、まずは児童の安心安全や挨拶等のつながりを優先する取組を通して、多くの児童が前向きに学校へ来ている。これからもまずは「安心・安全」をキーワードに、本校の校区の特徴に合った学習を各クラス・学年に留めずに系統的に学校全体として推しすすめ、さらにはＰＴＡや自警団・こどもＩＩ０番の家等の安全・挨拶の取組を通して地域を巻き込むことで、一滴の水が大河になるごとく進めていくことが大事であろう。さらに、児童が学んだことは放課後の生活だけでなく卒業した後の今後の人生の中でも役立て欲しいと願うとともに、児童がいずれ地域の大人として、菅原小学校の児童を見守ってくれるような「文化」を引き継いで欲しいという願いも併せもちながら、今度も取組をすすめていきたい。